

## 入選

### ツバメとぼくの小さな親切

山口県 山口大学教育学部附属光小学校

三年 ライオン 智

ぼくの家には、広いにわがありません。でも、小さな花や、はち植えを植えることができます。きせつごとに、いろいろな花や小さなやさいを、お母さんといっしょに育てて楽しんでいます。

今年のはじめて、ツバメがすを作りにきてくれました。すを作るときはとてもたいへんそうで、毎日ハラハラしながら見ていました。

それからしばらくして、ツバメの赤ちゃんが生まれて、かわいい声でなっているのをぼくは下から見て、「おはよう、今日もいっぱいごはんを食べてね。」と、声をかけました。

小さいツバメの赤ちゃんは、あっというまに大きくなって、空をとぶ練習をはじめました。

「がんばれ。がんばれ。」

とぼくは心の中でおうえんして、四羽のツバメがとんだとき、

「やったー。」

と大きな声が出ました。ツバメのひながとべるようになって、とてもうれしかったけれど、空っぽのツバメのすを見ると少しさみしくなりました。

次の日は、ツバメのすの下をそうじすることに決めました。ツバメたちがすを作ったり、ツバメの赤ちゃんたちが、ふんをしたので、すの下はとてもよごれていたからです。学校のそうじを思い出しながら、ぼくは、

「ありがとう。」

と、ツバメに言いながらそうじをしました。すると、ぼくの頭の上でツバメの声が聞こえました。ふと上を見ると、3羽のツバメがぼくの頭の上をとんでいました。

「ぼくにさよならを言いに来たのかな？」

ツバメはへんじをするように、「チュッチュッ」となきながら何どもぼくの上をとんでいました。

「また来てね。」

と手をふると、ツバメたちはまたどこかへとんでいきました。ぼくのお母さんは、

「ツバメのすのそうじをしてくれたから、ありがとうを言いに来たんだよ。」

と言いました。

ぼくの家のにわは、広くありません。でも、ツバメたちはぼくの家をえらんでくれました。みじかい間だったけれど、ツバメたちは、ぼくがお花を見てうれしくなるような気持ちをくれました。とても親切なツバメです。

そしてぼくはツバメたちに、「ありがとう。」をこめて、すの下のそうじをしました。これはぼくとツバメの「小さな親切」だと思いました。